
夫婦の日常
絶倫夫に翻弄される新妻編
オリジナル小説「花びら姫の恋」
R18パラレル「こいのうた」シリーズ①
18



世界観紹介

このお話は師走瑠璃のオリジナルファンタジー小説「花びら姫の恋」のR18パラレル小説シリーズ「こいのうた」の一編です。

本編では婚約中の二人ですが、こちらのパラレルは本編の二、三年後で主人公たちは結婚してます。
お妃として奮闘する主人公が、あんたの夫奪ってやるわ、と本編未登場の令嬢から好戦的な宣言されて、落ち込んでいる設定でお話スタートです。
本編シリーズに絡めたパラレルワールドですが、あまり本編の背景等考えず、気楽にお読み下さい。
ただ、世界観を知っておいて頂けるとお話に入り易いと思うので、本編未読の方向けに、簡単に世界観をご紹介。

①精霊等が身近な異世界。貴種という、人類の古代種と、亜種という現生人類の二種類の人間が共存する。貴種はファンタジーでいうところの、エルフが一番近い存在で、現代はめっきり数も少なくなっている希少生物。主人公と男主人公は貴種。

②大前提として、貴種は貴種女性にしか産めない、という不文律あり。父親が亜種でも母親が貴種なら、生まれる子供は貴種。逆に父親が貴種でも母親が亜種なら子供も亜種。

③皇家のご先祖を祀る宗教的な神殿あり。皇家とは仲良くない。　　以上。

無料公開時より追加二篇で三万文字も文字数増えてしまった上、自己満足爆発してますが、お楽しみ頂けたら嬉しいです。

※AI生成イラストを師走のオリジナル絵に近づけて修正し、表紙、挿絵に使用しています。

人物紹介

武尊（ほたる）・キアリズ・黄花（こうか）・サディル

男主人公。黄國皇太子（おうこくおうたいし）、貴種（きしゅ）。
皇子様だけど、貴種の男は不要という
理由で空気のように扱われて来たので、
空気のように消えようとしていた所を
父親に表舞台に引っ張り出された。
本編では初恋の女の子と結ばれる事に
まだ現実感がない状態だけど、こちらの
パラレルではエロ魔人です。
歳は海夜の一歳上。

平尾（ひらお）　海夜（みや）

主人公、貴種。
祖母が異世界の貴種皇女という血筋の
日本人。人の長所を自然に読み取る、
ぽやんとした王道主人公。
ご縁がある人は引き寄せられるという
謎理論で異世界転移して、親戚の皇子
様と婚約。
健全本編では18〜19歳。こちらの
パラレルでは22〜23歳が目安です。
とにかく男主人公の事が大好きで、
変態行為でも受け入れようと頑張る子。

1．夫婦の日常

結婚というもの、家庭を作るという事について、色々考えたり気に掛けなければならない事があるのに、あっという間に日々は過ぎていく。

海夜（みや）にはゆっくり自然に任せようと思う事でも、結婚半年が経つ今、次代を期待する声も増えてきた。その上あからさまに側室狙い、なんて宣言するご令嬢が目の前に現れたら、いくら夫がそれはないと断言していても、気持ちはしょんぼり下降する。

「――――海夜？」

夫の声が耳に届き、思考の海に沈みかかっていた意識が、ふ、と上向いた。

目が合うのは、柔らかな間接照明に艶めく、夫の左右異色の瞳だ。シャツの首元から覗く首筋と鎖骨が色めいて見えて、夫婦の寝室にいるのだと意識が向いた。

「どうした？　気が散っているな？」

不思議そうな彼に、いけない、と思い直す。忙しい夫との時間は限られているのだから、一緒にいる時に上の空なんてあり得ない。

「体調が悪いか？　気分が乗らないなら、今日はやめておこう」

そんな風に言いながらも、彼の手は海夜の夜着の肩紐を落として、柔らかな膨らみを片手で堪能している。水風船を捏ねるような、たぷん、たぷん♡という音に頬が熱くなり、揉みしだかれる刺激でぷくり♡と勃ち上がった紅いとんがりを、指の腹で優しく擦られて甘い吐息が漏れる。

「……ンン……♡」

「無理やり奪うのは趣味じゃない。いつもならこの段階でびしょ濡れのおまえが、どこか具合でも悪いのか？」

（心配してくれてるみたいだけど、言い方があるでしょ）

卑猥な言い回しをしながら、武尊（ほたる）の指は海夜の下着の中を弄り、足の付け根のあわいをゆっくりとなぞる。自分でもわかる程、ぬる♡とした感触があるのに、海夜の身体を知り尽

くしている彼が、普段と違うと感じる位には、今の海夜の身体は心に引っ張られているらしい。

「共寝（ともね）をするなら常に最高に気持ち良くしてやりたい。気が乗らなくてもその気にさせる技術がないのは、おれの力不足だ。謝る。だからまずは、気が乗らない理由を聞かせてくれ」

「ん♡……ァん♡」

ちゅっちゅっ♡と音を立てて胸に吸いつき、舌と唇で濃厚に愛撫して彼は囁く。肩も首も沢山紅い跡を残されて、最近はそれを隠す為の肩が出ないガウンばかりを着ている。

だってそれを目にした女の子達が、武尊との情事に興味を持ったら嫌だから。

もっと言うと、武尊との情事を夢想されたら心底嫌だから。

これは困った。武尊に愛でられれば愛でられる程心配事が上乗せされて、気分の乗らない夜も増えるのかもしれない。

「ふぁ……♡　わたし、あのね、武尊……ん♡」

「話す気になったか？」

立ったまま愛撫を受けていた足が震え出し、そろそろ限界に近い。

腰を支えられて、男の人だと感じる腕の逞しさに、切なくなる程愛しさを覚える。彼の硬く、高く聳(そび)える欲望も夜着越しに押し付けられ、求められる悦びに女の欲も膨れ上がった。

夜着をはだけさせられた左胸の先端を、嬲るように強く吸われ、舌先でなぞられる。狂いそうな愉悦の快感があわいの奥で疼くのを感じて、理性を飛ばされる前に気持ちを明かさなければと奮い立たせる。

「……武尊はわたしのだって、言いたいの……っ、んっ……♡だから、武尊に興味を持つ女の子を、好きになれないの……っふぁ♡あ、ぁっ♡っあぁぁっ……っ！♡♡」

絶え間なく左胸に注がれる愛着の吸引に、とうとう快楽の波が海夜を高みへと連れ去った。光が爆ぜる意識の空白と同時に、お腹の奥深くが大きくびくんっ♡と震慄(わなな)く。びくびく♡と隘路は細かく収縮を繰り返し、深い所から溢れた愛蜜が、下着では抑えきれない程漏れ出して内腿を伝って行った。

「……胸だけでイったのか」

息を乱し吐息混じりに笑う武尊が、驚いたように呟いた。

「しかも片胸を少し弄った程度で」
「つん……♡ やぁ……言わないで……♡」
「気が乗らないどころじゃないな。焚き付けたか？　淫らだな」
「ぁっ……あんっ♡ ……っい、いじわる……っんん♡」

海夜を抱き寄せ、耳元で囁くその艶っぽい声にも、身体の深い所が反応して声が洩れる。浅い絶頂の余韻はまだ顕著で、こぽり♡と蜜が溢れて来るのを感じる。
海夜だってこんなつもりじゃなかった。ただいつもより、ちょっと気分が沈んでいるなと思う程度。
それなのに、それを武尊が悟ったのだと理解した瞬間に欲が出た。
もっと知ってほしいと。

もっと自分の考えている事、深くで感じている不安、何もかもを知って、そうしてそれでも愛して欲しいと。
そうしたら、こんな事に。

「おまえの素直さには毎回驚く。言葉に身体が引きずられたのか、その逆か……、どちらにしろ、おまえがおれを心底欲しがっている事はわかった」
「……っそういう事、……ぁっ♡言わないでってば……あっ、んっ♡」

下着の腰紐が解かれ、しとどに濡れた桃色の秘所が夜の空気に晒される。
海夜の申し訳程度の和毛（にこげ）に指先を這わせ、今にも咲きそうに膨らむ花芽を、武尊は焦らすように微かに擦った。

「……は、パンパンに膨らんで破裂しそうだ」
「んぅ……♡」
「どちらがいい？　指と、舌と」
「……っな、何言うの……っ、やんっあぅ……♡」

驚きに声をあげれば、花芽をにゅむ♡と柔らかく摘まれる。

その選択肢は何を意味するのか。

わからないほど初心じゃない。彼の長い指も熱い舌も知っている。烙印を押されるように教え込まれたから。他でもない目の前のこの男が、何も知らなかった海夜の身体をそうやって変えた。

それがどちらであっても、結局海夜には抗えない快楽だと。答えられず、震える唇をキュ、と締めると、彼は舌舐めずりするように低く囁いた。

「――わかった。両方か」
「……っひぅ！♡♡」

両方、という言葉に疑問が浮かぶ前に、海夜は出窓の桟に身体を押し上げられ、両脚を大きく広げられていた。
裾の長い夜着を腰の辺りまでたくし上げられ、腰紐を片方だけ解かれた下着が辛うじて膝の辺りに引っかかっている。それを着けたまま秘所を晒すなんて、まるで……。

「着衣のままだと、犯されているようで興奮するか？」

海夜の右膝の裏に手を差し入れて更に脚を広げさせながら、武尊は海夜の考えを読んだように顔を覗き込んでくる。
愛蜜を滴らせた海夜の秘裂を、くぱ♡と割り、中の熟れ

た果実に指先を這わせて、武尊はこくり、と喉を鳴らした。彼も興奮している様子に、はしたなく両脚を広げて全てを見られているという羞恥は、期待へと変わっていく。

「そんな事……、……ちょ、ちょっとだけ思ったけど、武尊になら、それも……っひゃん！♡」

素直に気持ちを明かせば、ふっと身を屈めた武尊の熱い舌が、海夜の桃色貝を割り膣内へと侵入して来る。ねとり♡と濡れた感触と熱い吐息が直接秘裂の粘膜に触れて、悲鳴のように高く声が上がった。

彼の舌が自分の中でじゅるじゅる♡と音を立て蠢く度に、びく♡びくり♡と身体が反応してガラスの窓を揺らす。その度に窓枠とガラスが硬質な音を立て、中で何かが起こっていると外の者に悟らせるには十分だろう。

レースのカーテンしか掛けられていない出窓の下は、皇族専用のプライベートガーデンで、夜番の歩哨達が警備の為に歩いている。三階の寝室とはいえ、ガラスの窓が音を全く通さないという保証はなく、外から見られるのではないかという背徳感に、キュウ♡と隘路が締まる。

「……これだけでも締まるな。どれだけエロい身体だ」
「ん……っんぅ♡だって……♡外から見えちゃうから…
…っ、ふあっ♡こんな、恥ずかしい格好……っ、あ♡ぁう♡」
「そうだな。こんなに淫らに乱れたおまえを、誰かに見られたら大変だ。……だが、見たくても見られないのが奴らだ。覚えておけ」
「んぁ♡なに、どういう……？　あっ、やッ♡ぁあっ♡
」

不思議な事を言われたけれど、疑問に思う間もなく再び責め立てられて声が上がった。

淫芽を舐め上げられ強く吸われた直後、舌をグリ♡と奥まで捩じ込まれ、同時に膨れて勃ち上がった淫芽を指で強く押し潰される。そのまま小さく円を描くように優しく捏ねられて、身を捩る官能がお腹の奥から迫り上がってくる。

――――クチュ♡チュっ♡
じゅるる♡じゅっ♡
チュプチュプ♡グリ、グリ♡ジュウウゥ♡

淫らな音が室内に響き、チカ♡チカ♡と星が瞬くような光が見える。

奥が期待に震えて大きくうねり、愛蜜を溢れさせた隘路を、

武尊の舌がグチュグチュ♡と音を立てて出入りする。海夜は彼の髪に指を差し入れ、顎を反らせて切なさに喘いだ。

「ふぅっ♡んあぁ♡あんっぅ♡わたし、もう……♡♡」

クる。

蓄積された淫らな欲が解放される瞬間が。

圧縮された快感を解き放つ時が。もう、目の前に。

そう思った瞬間だった。

「んぁっ♡あ……♡やぁ……♡なんでぇ……っ」

白い光を見られると思ったその瞬間に、武尊は舌と指を素早く引っ込めたのだ。

得られなかった愛を乞い、切なく吐息を漏らす海夜の唇を、口元を袖口で拭いながら身を起こした武尊の親指がなぞった。

「言っただろう？　両方くれてやる、と」

「あ！♡　あ……、やぁ♡　あぅんぅぅっ……♡」

低く獰猛な声と共に、愛蜜をたっぷり纏わせた長い指が海夜の身体をあばこうと、ぱくり♡と開けた孔へと侵入してくる。甘く滴る蜜は止まる事を知らず、奥へ奥へと指を誘う。

自分の内側がうねっているのがわかる。もっともっと♡と浅ましくねだり、腰がゆらゆら♡と淫靡に揺れる。

――ぐち♡　じゅぷ♡　ぐちゅぐちゅ♡　ジュプ♡

蜜壺を優しく丹念に掻き混ぜながら、快感に背を仰け反らせた海夜の、突き出された乳首に武尊は噛みつくように吸いついた。支えるように背に回されたもう片方の手が、抱き寄せるように乳房に回されて、吸われていない方の先端をクリクリ♡と嬲る。

蜜口をくるり♡となぞられ、蜜壺にとぷり♡とぷり♡と優しく指を突き挿される。耳元で「増やすぞ」と熱い吐息と共に囁かれた通り、指二本分の質量が、ぐぐ♡と蜜口を抉った。狭い隘路を広げてゆく指の動きに一瞬身体が竦むが、奥をコリコリ♡と擦られれば、すぐに身も心も蕩ける。

甘い刺激に蜜が溢れ出し、武尊の指と自分の内腿を伝い落ちてポタポタ♡と桟を汚す。

少しの傷もつけない、とでもいうように優しく抽送していた彼の指も、海夜の甘い吐息と官能の喘ぎ声に、少しずつ速さと激しさを増す。ぐち♡ぐち♡と粘液の音を立てて激

しく掻き混ぜられると、ぎゅうう♡と指を逃さないように隘路が締まり始めた。

与えられる刺激の強さをうまく処理できず、海夜はただ濡れた声で喘ぐ。

「あぅ……っ♡ はぁっ♡ あん♡ あっ……♡ ぅあっ♡ 武尊、ゆび……♡ あっ♡ 長くてっ……♡」

「奥に当たるか。気持ちいいだろう？」

ぐっち♡ぐっち♡と静かな寝室に響き渡る粘液の音と、海夜自身の切ない嬌声に、官能の興奮が高まっていく。

「おくぅ……♡ きもちぃ♡ あ♡ ……あぁっ♡ あぅっ♡や、もぅ……っ♡ あンっ♡ イく……♡ イっちゃ……っ！♡」



彼の指に腹側の一点を突き上げると同時に淫芽を強く押され、花びらは強い快感に閉じるように大きく震慄(わななな)いた。背を駆け上がる開放感と、膣のビクビクビク♡という細かな痙攣を経て、再び開いた花びらは充血してふっくら腫れ上がり、蜜口は物欲しげにヒクヒク♡震えて大量の愛蜜を垂れ零していた。

「上手くイけたな」

軽い絶頂を味わい、空気を求めて荒く呼吸を繰り返す海夜の唇を武尊は深く吸った。

彼の美しい額にも汗が浮かんでいる。熱を感じる程海夜に興奮してくれているのだと思うと嬉しくて、それだけでまた下腹部の奥が疼く。

夜着の上衣を勢いよく脱ぎ捨てた彼の、武人らしく引き締まった上半身の筋肉は美しく、石造りの彫刻のようだ。手を伸ばせば簡単に胸の筋肉に触れる事ができて、その甘さに吐息が溢れた。

初めて会った時は、まだお互いほんの子供だった。

二度目に会った時は少し大人になっていたけれど、お互いの気持ちを確かめ合うには時間があまりにも足りなかった。

そうして三度目に会った時。

大人になった二人は、ようやくお互いを想う気持ちに嘘偽りなく正直に向き合って、こうして温もりを分かち合えるまでになった。

愛情で求め合う夜を重ねる度に、どれだけの快楽を教え込まれたか。海夜は武尊しかしらない。彼だけを見て生きてきたから。

「……こら。イタズラか？」
「……硬いわ……♡」

指先で武尊の胸から臍の下まで線を描くようになぞって、夜着の上から大きく膨らんで主張しているそれを優しく撫でる。甘い刺激に苦笑して、武尊はその行動の意味を確認した。

わかってるくせに、と熱く息をつくと、彼は意地悪く口端で笑んで、先を促すように自身に当てられた海夜の指を愛しそうに撫でた。

請われた気がして、ずるり♡と下穿きから彼を取り出すと、高く聳え勃つ雄槍が勢いよく跳ねるように姿を現した。凶悪で立派な屹立に、胸が高鳴る程期待してしまう。

初めて抱かれてから今まで、飽かず海夜を容赦なく責め立て、甘く鳴かせ、欲望に満ちた白濁を海夜の奥深くに吐き出す肉剣は、先端の割れ目から透明な液体をトロトロ♡と零

し、収まるべき海夜の肉鞘を求めてビクビク♡と蠢いている。

これが自身を深く貫く瞬間を想像して甘く息をつくと、知らず隘路は締まり、蜜口はヒクヒク♡と震えて蜜を滴らせた。

海夜のその反応に、好きに弄らせていた武尊はいたぶるように口端に昏い笑みを寄せた。

蜜を垂らす海夜の蜜口に先端を当て、秘裂を割り、何度もナカに挿入れかけてはやめる。筋の浮かぶ屹立を擦り付けられる度、蜜口で淫らな水音がする。擦られる刺激と焦れる感覚の切なさに甘い声が漏れて、つい懇願する言葉が出てしまった。

「ん……♡はやく、武尊が欲しいの……♡焦らさないで……意地悪しないで……♡」

「っ、性悪が……っ理性を試すな……っ」

激昂するように歯の隙間で低く唸った武尊は、海夜の夜着のもう片方の肩紐を引きちぎる勢いで引きずり下ろし、乳房を強く掴み寄せて先端を舐めしゃぶりながら、蜜口に当てていた自身の猛る昂りを一気に海夜の蜜壺に突き刺した。

――ぐぷププ♡♡ずぶぶっ♡♡ず、……ぶうっ♡♡♡

「あっ……〜〜っ♡♡♡！！」

ひと息に最奥まで貫かれ、甘い痺れが脳天を突き抜けた。背筋を駆け上る強い情欲に、目の奥で白い光が弾け、意識を数瞬飛ばされる。

身体は激しい快楽を貪り、咥え込んだ武尊の灼熱の杭を、ぐいぐい♡と更に奥へ飲み込もうとしている。

「ひあぁぁんっ♡♡ あんっ♡ あーっ♡♡」

「……っ挿れただけでイッたか……っ」

海夜の中の規則的な震慄きを堪能しながら、武尊は熱く息を吐いて海夜の唇に濃厚に口づけを繰り返した。

蕩ける程優しく、そして淫らなその口づけは、宥めるような詫びるような色があって不思議で、中に彼を感じて甘く喘ぎながら、疑問の目を向けてしまう。

すると武尊は、海夜の乳房の先端をくりくり♡と親指の腹で捏ねながら囁いた。

「……無理やり奪うつもりはないと、言ったそばからこれだ

からな。乱暴にするつもりはなかったんだが」
「……っ気持ちいいわ……♡ んンッ♡ 奪われたなんて、思わない……あ、あ、あ♡」

偽りなく答えれば、武尊も埋めた自身を御せずに少し腰を揺らす。

「……そうじゃない。おまえが乱れれば乱れる程、おれの中で欲は膨らむ。おまえは嗜虐心を刺激すると自覚がない……、周りの男がどんな目でおまえを見ているかも知らないだろう」
「あ♡ ぁん、あっ♡ こすっちゃ……っだめ……♡♡」

挿入の時とは違い、優しく穏やかに抽送されているのに、共に秘豆も擦られて、刺激はいつも通りに甘くて嬌声が上が

る。

「……そうやってこの腕の中で乱れる様を見る度に、おまえはどこまで色を放つのか見たくなる。……だが、日毎増すおまえの色気に当てられた男どもが、虎視眈々とおまえを狙っている事を知っているか」

「ひぁっ……♡ ぁっ♡ ……知らな……わたし、武尊だけっ♡ あぁ、あっ♡ 武尊しか要らな……ッ♡ あ、あ♡ あぁん♡」

両手で膝裏を掬い上げられ、更に奥へ突き上げられて、最奥の子宮の入口に武尊の丸い先端が当たる。太くて長い雄槍がその感触に辿り着くや否や、彼はむしゃぶりつくように腰を振るい始めた。

激しい抽送に愛蜜がグチュっ♡ グチュっ♡ と淫らな音

をたてる。
その荒々しさと激しさは、海夜をあっという間に熱の渦に攫い、揺さぶられる度に共に揺れる乳房に、武尊が舌を這わせるだけでも快楽に翻弄された。
きゅきゅぅ♡と切なく隘路が締まる。激しく突く雄槍を逃すまいと蜜襞がうねり、包むように締めつけていく。
――――ぐぽっ♡グポっ♡　ぐちゅ、ぐぽっ♡
パンパンパンパン♡♡
ジュッ、ジュポ♡♡ばちゅっばちゅっ♡♡♡
「あ、あ、あ♡♡ああっ♡ほたる、すき♡あぁッ♡武尊だけが、欲しいの……ッ♡　ぁ♡　ぁ♡あッ♡あッ♡」

「……ああ、くれてやる。いくらでも……ッ」

武尊の唸るような言葉と共に、ひときわ奥まで灼熱の肉棒が海夜を突き刺した。ごりり♡と深い場所に彼が入り込み、海夜を容赦なく責め立てていく。

再び目の奥に光の瞬きを感じた。今までとは違う七色の光。深い深い場所で彼と繋がっている時に見える光。

今度こそクる。海夜が希んだ、武尊の愛に捕まる瞬間が。

きゅんきゅん♡と蜜壺で、武尊を愛して切なく啼くような感覚を覚えた時。

間断なく激しく腰を叩きつけていた武尊が、荒く息をつきながら、不意に耳元でやさしく囁いた。

「……海夜……、愛している」

「アッッ……ッ!!♡♡」